

1型糖尿病新治療法

徳大病院 治験順調

徳島大学病院の研究グループが、血糖値を下げるホルモン「インスリン」が分泌されなくなる1型糖尿病の根本治療を目指す再生医療の臨床試験（治験）を始めた。4月、患者自身の細胞から作製したインスリン産生細胞の移植手術を世界で初めて実施。病院によると、経過は順調で、2例目の移植手術に向けて準備を進めている。

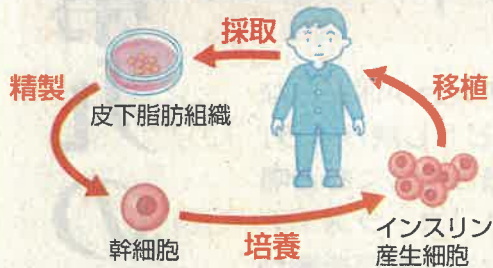
再生医療で世界初

1例目の患者は2月に脚の付け根から1センチ程度の皮下脂肪組織を採取。院内の設備で幹細胞に精製し、独自に開発した手法で培養したインスリン産生細胞を

移植後、診察や血液検査、画像診断などで患者の経過を観察を続けたが異常はなく、1カ月で退院した。今

腹腔鏡手術で腸間膜に移植した。

1型糖尿病 新治療法のイメージ



1型糖尿病は、膵臓の細胞が自己免疫などに壊されて発症し、患者数は10万〜14万人とされる。子どもの頃に発症する例が多く、重症の低血糖になると突然意識を失うこともある。体質や生活習慣などが原因の「2型」とは異なる。

新しい治療法は遺伝子操作を伴わず、拒絶反応や細胞のがん化が起こりにくいとされる。1例目の患者も、副作用として想定されたアレルギー反応などは確認されなかったという。

研究グループを率いる池本哲也教授（消化器・移植外科）は「最終的には、外部の独立した委員会の評価に委ねられるが、移植後30日の段階では、安全性に関しては成功と言えるのではないかと話している。」

(山口和也)